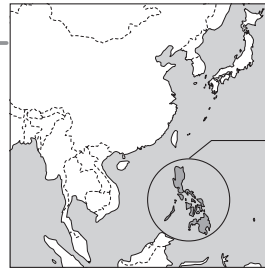


# ユニセフ 子ども物語

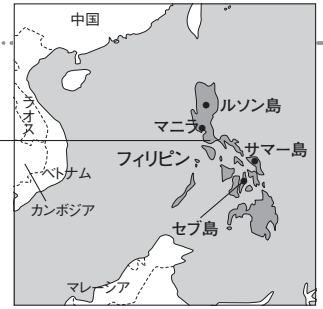
## 地球に生きる子どもの暮らし

Republic of the Philippines

### フィリピン共和国



地図は参考のために掲載したもので、  
国境の法的地位について何らかの立場  
を示すものではありません。



## お母さんに会いたい

### ジェフリーの冒険

ジェフリーは12歳の男の子です。フィリピンのセブ島にあるパリアン・ドロップ・イン・センターへ来て、もうすぐ6ヶ月になります。センターは、ストリートチルドレンと呼ばれる、1日のほとんどを路上で過ごしている子どもたちに食事や寝場所などを提供しています。

ジェフリーはセブ島から船で12時間かかるサマー島で家族と暮らしていました。

彼のお父さんは大酒飲みです。家族を大切に思っているのですが、お酒を飲みすぎると家族に暴力をふるってしまいます。そのせいで、お母さんはジェフリーと兄弟がまだ小さい頃に家を出て行ってしまいました。

ある日、お父さんはいつものようにお酒を飲んで、ジェフリーにひどい暴力をふるいました。ジェフリーは「もう、いやだ。家を出よう。マニラにいるお母さんのところに行こう。」と決心しました。



ジェフリーの冒険が始まりました。サマー島のフェリー乗り場へ向かい、船にこっそりと乗りこみました。船はセブ島に着きました。目指す場所はお母さんのいるマニラです。しかし、セブ島からマニラへ行く船が見つかりません。そこで、飛行機に乗ることを思いつきました。ジェフリーは、お客さんの子どものふりをして、機内までたどり着きました。しかし、マニラ行きの飛行機は満席で、ジェフリーが座る席はありませんでした。忍び込んだところを見つ

かり、飛行機から降ろされてしまいました。そして、センターへ連れて来られたのでした。



### センターでの暮らし

センターはユニセフの支援を受けて、セブ市が中心となって運営しています。路上に暮らす子どもたちが、毎日センターにやってきます。お風呂に入ったり、お祈りをしたり、ご飯を食べたり、勉強したりします。

センターに連れてこられた子どもたちの中で、家族と暮らしていない子どもたちは、ソーシャルワーカーの資格を持った職員が警察と協力して子どもたちの親を探します。両親も新聞や警察に届け出ていることが多いのです。しかし、ジェフリーのように、親の所在がわかっても、虐待などを受ける可能性がある場合は引き渡しません。中には、20歳になるまでセンターにいる子どももいます。

### 将来の夢

ジェフリーは、早くお母さんに会って抱きしめてもらいたいと思っています。そして、ずっと一緒に暮らしたいと思っています。「お母さんに会えたら、バスケットボールの選手を目指すんだ。」とジェフリーは話します。

センターでは、一日も早くジェフリーがお母さんと会えて一緒に暮らせるように、マニラに暮らしているお母さんを探しています。



<文・構成：(財)日本ユニセフ協会>

フィリピンは、大小約7,100以上の島々から成る群島国家で、多民族、多言語の国です。8,800万人を超える国民が広く国中に分散して暮らしており、2006年現在の出生率は3.2%と高くなっています。人口の64%は都市部に暮らし、人口の41%にあたる3,680万人は子どもです。経済格差が広がり、貧困の度合いは2003年の24.4%から2009年26.9%に悪化しました。国民の15%は1日1ドル未満で暮らさざるを得ない状況です。そして、毎年8万人もの5歳未満の子どもが予防可能な病気が原因で亡くなっています。これは開発途上国の中では状況が比較的良好いとされるフィリピンのイメージとは大分異なります。

## 厳しい状況にいる子どもたちを守ろう！

### フィリピンでのユニセフ支援事業

ユニセフのフィリピンでの支援事業は1948年11月に開始され、1979年には緊急支援事業から開発支援事業に移りました。現在はその6期目の支援事業となり、2015年のミレニアム開発目標の達成に向け、妊産婦死亡率の減少、栄養不良の改善、基礎教育の質の向上、そして子どもの保護対策事業の構築に特に力を入れ、活動しています。

フィリピンでは5歳から17歳の子ども、400万人が少なくとも1日4時間、その多くが賃金の支給を受けずに労働に従事しています。そして、その半分以上の240万人が危険な状況下で働いています。また、6~10万人の少女売春婦がいると推計され、ストリート・チルドレンも膨大な数にのぼるとみられています。ユニセフ・フィリピン事務所は、他の基本となる支援事業と並んで、路上・地域・施設を基盤とした「子どもの保護」活動に力をいれて取り組んでいます。日本人にとっては観光地としてのイメージが強い、セブ島での「子どもの保護」事業について詳しくみていきます。



©日本ユニセフ協会/2010  
自警グループのメンバー

とした買春を斡旋しているリクルーターに騙されて働かされる子どもや、貧しさから畑で働く子どもが多かったです。

そこで、地域の親やカウンセラーが集まって自警グループを結成し、親に子どもが学校に通うことの大切さを伝え、働いている子どもを学校に再び通わせるよう説得をしてみました。

また、子どもが危険な仕事についていないか、子どもの姿が見えないなどの人身売買の兆候がないか等グループ内で連絡を取り合い、人身売買や児童労働を未然に防ぐ予防型の活動にも力を入れています。

活動の結果、親の理解を得るまでに1年以上かかることもありましたが、多くの親が教育の大切さを理解するようになり、子どもの中退が減りました。今では、地区のほとんどの子どもが中学校へ通うようになっています。

### セブ島での子どもの保護事業

#### 路上を基盤とした活動～移動式の教室

フィリピンで、小学校での授業や集団生活についていけず退学してしまう子どもたちの多くは、厳しい状況で暮らしている子どもたちです。小学校での授業や集団生活の助けとして幼稚園は重要ですが、フィリピンでは幼稚園の多くが有料のため、子どもたちを通わせる余裕がありません。



©日本ユニセフ協会/2010  
移動式の教室で使用しているバス

そこで、ユニセフとセブ市が協力し、幼稚園に通うことが難しい子どもたちを対象にバスを使用した移動式の教室を開いています。

現在、この移動式の教室には、約250名の子どもたちが参加しています。対象となる子どもは、両親がゴミの中から物を売るなどして生計を立てている家庭の4歳から6歳の子どもです。1人のソーシャルワーカーが40人の子どもの家庭を担当しています。毎週金曜日に家庭訪問をし、両親へプログラムの意義を説明し、カウンセリング等を行っています。



©日本ユニセフ協会/2010  
移動式の教室で学ぶ子どもたち

#### 地域を基盤とした活動～地域で子どもたちを守る

セブ市から車で1時間半ほど行った、山の上に位置するアドラオン地区では、親やカウンセラーが中心となって自警グループをつくり、地域で人身売買や児童労働に対する認識を高める子どもの保護活動を行っています。活動を行う以前、地区では、貧困家庭をターゲット

### 施設を基盤とした活動

#### ～暴力や性的被害にあった女の子たちを保護する

「Home for Girls」は、人身売買や育児放棄、性的虐待などの被害にあった17歳までの女の子たちを保護しているリハビリテーション施設です。被害にあった子どもたちの家庭の多くが貧困状況にあり、また、教育を受けていない親が多いと言われています。



©日本ユニセフ協会/2010  
セラピールームの様子

センターには女の子たちが暮らす部屋の他に、セラピールームやカウンセリングルームがあります。心に傷を負った子どもたちはどのように感情を表現したらよいか分からないため、子どもたちの心のケアをするために、カウンセリングやセラピーが必要です。センターでは、劇やアートペイントを使った心のケアを行っています。

また、施設では職業訓練も行い、子どもたちが施設を出た後の人生設計を支援しています。心に傷を負い、人を信用できなくなってしまった子どもたち。スタッフは、子どもたちが安心して何でも話ができるよう、時間をかけて信頼関係を築いています。

### フィリピンの状況

(より詳しい統計は「世界子供白書 特別版」をご覧ください)

項目	フィリピン	日本
18歳未満の子ども数(2008年、1,000人)	36,793	20,759
1人あたりの国民総所得(2008年、米ドル)	1,890	38,210
5歳未満児死亡率(2008年、出生1,000人あたり)	32	4
妊産婦死亡率(2005、出生10万人あたり)	230	6
改善された水源を利用する人の比率(全国、2006年)	93	100
適切な衛生施設を利用する人の比率(全国、2006年)	78	100
初等教育純就学率(男子)(2003-2008年)	91	—
初等教育純就学率(女子)(2003-2008年)	93	—

出典:「世界子供白書 特別版」